

沖縄における陶製甕形蔵骨器の分類試案 -浦添の遺跡出土資料の検討を中心に-

宮城 明恵・安斎 英介 (浦添市教育委員会)

1. はじめに

沖縄では、かつて風葬と洗骨の習俗が広く行われていた。洗骨後の骨を納める蔵骨器は、一般に「厨子」(ジーシ)や「厨子甕」(ジーシガーミ)などと呼称される。この蔵骨器については、上江洲均らによる体系的な研究をベースに、近年は那覇市や浦添市における墓群の発掘調査成果を基に分類や編年が構築・整備されてきた。しかし、現状では用語の定義や解釈について一定ではないのが現状であり、また近年発表された資料の中には従来の分類には当てはまらない資料がみられる。これらのことから、本発表では蔵骨器分類の再構築に向けて、陶製甕形蔵骨器の分類試案を行う。今後は型式学的検討を含めた蔵骨器編年の整備につなげていきたい。

2. 分類概念の整理

- ・ 上江洲均による分類試案・編年の発表 (上江洲 1980)
- ・ 浦添市教育委員会による分類と安里進による編年研究 (浦添市教育委員会 1997、2006)
- ・ 那覇市教育委員会による銘苅古墓群などの調査報告 (那覇市教育委員会 2007)
- ・ 近年の動向 (西銘 2004・2005、那覇市教育委員会 2011、那覇市立壺屋焼物博物館 2014)

- 上江洲分類に当てはまらない新たな資料が増加しており、分類案に追加・修正
- 用語が統一されておらず、分類名称を併記する傾向
- 概念設定にあいまいな点があるため、使用者によって概念が異なるケースもある
- 年代観が銘書に依るケースが多く、型式学的な検討を進める必要がある

⇒ 型式学的検討を含む編年の整備に向け、新たな資料を含む分類の枠組みを再構築する必要がある

3. 分類試案

「ボージャー厨子」と「マンガン釉掛け焼締め」における型式学的検討を行うため、これまでの抽象的な用語を用いた型式概念よりも明確な型式設定を行った。

共に甕形の器形である事に着目し、それぞれに共通する要素を抽出した。また、身と蓋は構成要素の違いから分けて分類を試みた。

身は口唇部の形状と施釉技法に着目し3類に分類した。蓋は縁部の形状と施釉技法に着目し3類に分類した。

身1類：口唇部が丸く成形され、マンガン釉がかけられないもの

身2類：口唇部が平坦に成形され、マンガン釉がかけられない、もしくは部分的に施釉されるもの

身3類：口唇部が平坦に成形され、マンガン釉が全面的にかけられるもの

蓋1類：縁部をなだらかに成形し、マンガン釉がかけられないもの

蓋2類：縁部を錨状に成形し、マンガン釉がかけられないもの

蓋3類：縁部を錨状に成形し、マンガン釉が全面的にかけられるもの

4. まとめと今後の課題

新たな資料を含めて型式に着目して分類を試みた結果、新たな資料は2類として設定でき、1類と3類の中間的様相を示している事が明らかになった。2類を設定することで、これまで別々に扱われてきたボージャー厨子とマンガン釉掛け焼締めについて「甕形蔵骨器」の型式的な変遷がより明確に理解する事ができる。

今後の課題としては、甕形蔵骨器の共通する要素の名称の統一化を図る必要がある。また、細分類を行い型式学的な変遷をより明確にする事によって、型式学的検討を含んだ編年の構築を繋げたい。

5. 参考文献（主なもののみ）

- 上江洲均 1980 「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族編』
浦添市教育委員会 2006 『比嘉門中墓の家族史・比嘉門中墓の調査概要』
浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群5—経塚南小島原A丘陵—』
那覇市教育委員会 2007 『銘苧古墓群—重要遺跡確認調査報告—』